

# 常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年6月4日(金)

## ◇ 「物差し」と「縫い針」と

2年生の算数は「長さ」の学習。子供たちの机の上には竹製の30cm「物差し」が確認できる。※竹尺

こっそり児童の手元を覗き見ると、定規もちゃんと所有していた。ということは、「物差し」は、担任が子供たちのために準備したものだ。授業のために小道具を準備するとは、新任の青木教諭も指導力を備えてきた。

「物差し」は学校の所有物品。昨年度、浅野教諭の要望で購入したものだ。

授業で「物差し」を使おうと、青木教諭が自分で「物差し」を探し出したのか、保管場所を職員から伝え聞いたのか、はたまた、たまたま見つけたのか、手に入れた経緯は不明だ。さらに、「物差し」を使って授業を進めたいと自分が思ったのか、先輩職員からアドバイスをもらったのか、はたまた、どこかしこから物差しの有効性の情報を得たのか、小道具活用の意図も不明だが、【現物に触れる】ことが重要なのである。

授業の区切りを待って児童に問う。「これは何という道具か知っていますか。」

ぱ ぱ ぱっ と、次々に手が挙がる。児童からは「物差しです」という返答。答えていない児童もこくり頭をもたげて頷く。「物差し」が認識できている証だ。この点だけでも、担任が「物差し」を準備した価値がある。

ふと頭に浮かんだことがある。

「担任は【物差しの材質】について、触れたかどうか」である。

「物差し」が定規と異なる点は材質と目盛。材質として竹が使用されているのは、

①伸縮やよじれによる変形が少ないため、「物差し」として使用した場合に、条件による誤差が少ないこと。

②しなやかさと丈夫さを備えていることに加え、均質である。角を欠かしたりすることも少ないことから、一番端が基準（0の位置）となっている。



※定規では、製図等に使用する硬い金属製のものはあるが、多くの児童が使用しているプラスチック製のO(ゼロ)規準は、端から離れているものが多い。

③「物差し」のmm単位の見当は、竹の繊維方向に直交する方向に刻印されている。さらに5cmの見当は「・」、10cmの見当は複数の赤「・」と半円「◎」。彫刻刀で掘ろうと思うならかなり大変だ。切削機械のなかったころはいったいどうやって彫ったのだろうか。黒や赤のインクを使った塗装は、目視のしやすさを求めたものだが、この塗装により「ほつれ」が生じにくい。さらにmm・cmの見当の反対側は「寸」だと思いきや、cm単位の刻印。時代の流れだ。

これら①から③は、いずれも素材としての竹の特性を生かしたものである。

はてさて、青木教諭は2年生を前にそのこと(※生活との直結)に触れたかどうかは定かでないが、そもそもO(ゼロ)基準があるかどうかで「物差し」と「定規」は使用用途が異なる。だから、現代にも「物差し」が存在するのだ。

児童が「物差し」を実際に使用するのは3年後。家庭科の「裁縫」である。

2年時の今、目にして触れているからこそ、使い勝手も変わってくる。

【生きる力】だ。

さて、小学校家庭科は、5年生から履修する教科である。裁縫箱セットの中身は、思いもよらぬ道具の進化を見せていた。

5年生家庭科の授業の終わりがけに教室を覗くと、「糸通し➡玉結び」授業の片付けの場面。柴田教諭に「V字になった縫い針の頭を見てください」と促される。

確認して驚いた。右の画像は他から拝借したものであるが、確かに頭が丸型ではなく【V字】になっている。



これは、Vのくぼみ部分に糸を引っ掛け、糸の両端を持って下方に力を加えれば、その圧力によってVのくぼみ部分が開き、糸が簡単に穴に通せるというしかけである。

金属の弾性というばねに使われる特性を上手に利用したものだ。

「なるほどな」と思いつつ、柴田教諭が児童に投げかける言葉を聞くと、「糸を通すと糸の先がほつれるよね。だから……」 そう。V字頭を使わず、私も習った手順で糸を通すことを学習していた。体験こそ力なり。【生きる力】である。